

『東方』二九〇号より

犀利な思考の凝聚

川合 康三(京都大学)

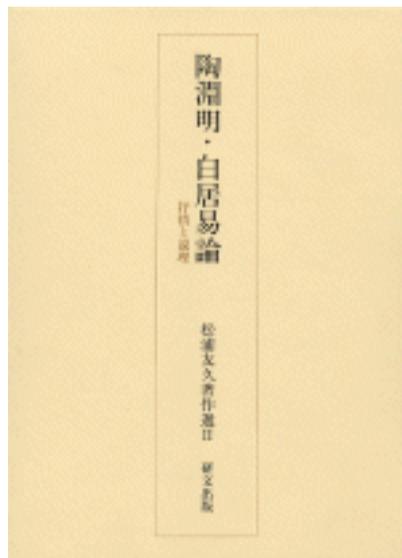
武田泰淳がたしかこんなことを書いていたと思う。——中国の文学を勉強している人のなかに頭のいい者は少ない、人からそう言われて自分は中国文学を選んだ、と。そこには例によって泰淳和尚独特の韜晦があつて、そのまま受け取るとはできない。小賢しい切れ味のよさだけで切り込めるような対象ではないとか、渾沌とした全体の重みをそのまま受け止める鈍重さがなければならぬとか、たとえばそういった背後の含意が籠められたものとして読むべきだろう。しかし我が身に即して考えてみれば、表面で言っていることもそれはそれで当たっていないでもない。確かにこの分野の研究はあまりクリアーでないかのようだ。対象がクリアーでないことと、それを扱う態度がクリアーでないことは区別すべきであるけれども、対象の性格に頼つてそれについて語ることもそれでよしとする、あるいはまた「学の伝統」の重さに頼つてなんとなくそれすべてが済まされてしまう。要は方法的な意識がはなはだ希薄なのである。すでに中国は後退し西欧の知が支配していた時代に本を読み始めたわたしたちの世代の者にとつて、中国の文学の勉強を始めた時に覚えた当惑はそこにあつた。文学研究の方法についてあまりにも無自覚、あまりにも鈍感。当時隆盛していた構造主義の目の覚めるような分析と較べて、情緒的なレベルに安住しているかに見えるのがなんとも歯がゆかつた。

そんな時期、それまでの「伝統」とはまるで異質な研究者

松浦友久著

『陶淵明・白居易論 抒情と説理』(松浦友久著作選II)

A5判・四五八頁・研文出版・九、四五〇円



がまさしく颯爽と登場した。松浦友久氏である。松浦氏は資料の扱いにおいて斯学のよき伝統である厳密さをきつちり身に着けながら、何よりもその思考の精緻さ、鮮明さ、鋭さが異彩を放つた。中国文学の領域にもこんな「頭のいい人」がいるのかと驚嘆したものだった。その後一貫して、いやさらにその方向に推し進めて、膨大な研究を遺し、忽然と他界された。

*

松浦氏の学界に対する貢献は、御自身の研究とともに、多くの優れた研究者を育て上げたことにあるけれども、その門下の方々の手によって『松浦友久著作選』全四巻がいま編まれている。その大綱を見るだけでも、松浦氏の研究が極めて体系的に構築されていたことが十分に理解される。『著作選』はすでに三巻が刊行されているが、ここで取り上げる第二巻には、陶淵明と白居易に関する論考が収めら

れている。陶淵明と白居易、この二人を松浦氏は詩の「説理性」という性格に着目することによって太い線で結びつけた。白居易が陶淵明の文学の早い時期における継承者であったという認識は広く行き渡っているが、それは陶淵明の隠逸から白居易の閑適が生まれたといった程度の、漠然とした把握にとどまっていたといえよう。

「詩的説理性」、それを著者は「何らかの道理や理念を詩によって説くこと」（本書五一頁）と説明する。それは陶淵明のすぐ前に位置づけられる玄言詩に顕著であるように、中国の詩のなかにすでに浸透していたものであるけれども、玄言詩が「理」を説くためのでだてとして詩を用いるのに偏していたのに対して、陶淵明の場合は説理を通してそこから「説理的な抒情性」といった「独特の抒情効果が生まれる」（一六九頁）ところが、まったく従前の文学とは異なる、と言う。説理性を唱えることのみならず、説理が喚起する抒情に説き及んでいるところがはなはだ重要な点だとわたしは思う。いったい、詩が詩であるゆえんは、何よりもその抒情性にあるはずだが、わたしたちのこれまでの営みはどれだけ詩の抒情性に踏み込んできただろうか。松浦氏の研究全体を通して特筆すべき特徴は、氏が常に対象とする文学作品の本質を明らかにしようとしていることである。陶淵明に関しても、白居易に関しても、今日に至るまで研究は汗牛充棟の観を呈しているが、往々にしてその文学の核心は避け、周辺を右往左往していたのではなかったか。もちろん周辺の研究も文学の理解のうえで大きな裨益を与えてくれる。が、それはあくまでも補助的な役割に留まることに心したい。松浦氏の研究の魅力は、いつもその文学を成り立たせている最も重要な要素に直接切り込んでいるところにある。

▶ トップページにもどる

説理と抒情、さらに切りつめてしまえば理と情、その両者は一見相い距たった両極にあるかに思われる。しかしそこにこそ「詩的説理の独自の機能」（二七八頁）が発揮されることを、著者は仔細に論述している（白居易における陶淵明）。そして、「中国文学史における詩的説理の系譜を想定した場合、白居易は、杜甫や蘇軾とともに、陶淵明のこうした説理的抒情性に、とりわけ敏感に反応した詩人であると考えられる」（二五一頁）。著者がここに挙げている陶淵明、杜甫、白居易、蘇軾、それは詩的説理の系譜においてのみならず、中国古典詩のさまざまな相のどれを取ってみても系譜を形成するだろう。四者は継承しつつ創新する関係において互いに結ばれるのだ。そしてまたこの四者が中国古典詩の山脈のなかでも、とりわけ際立った高峰であることは誰もが認めざるをえない。ということは、詩的説理なるものが、中国の文学にとっていかに重要な根幹を成しているかを示している。

松浦氏はこのように陶淵明、白居易の文学の核心を、詩的説理という点から鋭く解き明かしながら、それに基づいて個々の読み、解釈においても新しい見解を提出している（たとえば「陶淵明「曖曖遠人村」〈帰園田居、其二〉の解釈について——その所在と理念を中心に」の章など）。ありあまるほどの注釈、翻訳が出ている陶淵明にしても、いまだに解釈が定まらない点があるのは当然だが、理解が曖昧なまま、なおざりにされてきた箇所も少なくないことがわかる。こうした個々の解釈も含めて、氏の論ずる所は今後わたしたちが陶淵明や白居易を読んでいく際に拠って立つべき大切な足場となるだろう。

*

松浦氏の明晰で緻密な頭脳は、まさに水も漏らさぬ行文

となつてあらわれ、凡愚の身には自分の思考が追いつかないうちに、論旨とは異なる考え方の可能性が提示され、且つそれが否定される、といった具合で、手も足も出せないまま著者の思考に載せられて結論まで運ばれてしまう感がある。そして冒頭に記したように、自分の頭の悪さを改めて思い知らされるはめになるのが、いささか悔しい。明晰さをよくあらわしているのは、しばしば①、②と番号をつけて問題を整理していく論述の方法だが、これは下手にまねをすると、安易な単純化に陥つて、大事なものがこぼれおちてしまう危うさがつきまとう。しかし氏の場合には、そこに緻密さが相俟つて寸分の隙も許さず、いよいよ明晰さに輝きを増すかに見える。

陶淵明と白居易を結びつけた著者は、水も漏らさないからもちろん両者の差異についても指摘を怠らない。たとえば「白居易における陶淵明」の章では、両者が「詩的説理への体質的な愛好」という共通性をもちつつも、陶淵明の「対自性」に対して白居易の「対他性」という対比などを挙げて、「説理の過程および結果という点では、著しく対照的な部分を含んでいる」（二八五頁）と、違いも明らかにしている。「陶淵明と白居易とは、著しく相異なる性格をも併せもつ詩人」（二七七頁）であるからには、詩的説理とは別の面においても対比的な特徴が見いだされることだろう。さらにまた、上述した陶淵明―杜甫―白居易―蘇軾の系譜において、ほかの面から考察されるべきことものこされたままで、しかしいずれも松浦氏自身にそれを明らかにしていただくことがもはやかなわないことは、松浦氏にとつてそうであつたであろうように、わたしたちにとつても無念でならない。今は氏の仕事の総体を学んだうえで、のこされた課題を探求していくほかない。

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる ▶